

《インタビュー》

飯田泰三氏インタビュー記録

— 近代日本政治思想史をふり返る —

田澤晴子
平野敬和
藤村一郎

本稿のもとになった聞き取りは、2018年9月9日と12月1日、田澤晴子・平野敬和・藤村一郎の質問に対して、飯田泰三氏が答えるという形で行われた。田澤・平野・藤村の3名は、2014年4月に、「大正デモクラシー」の再検討を戦後思想史の読み直しと関連させる研究会を立ち上げた。その活動の柱の一つに、「大正デモクラシー」研究を進めてきた研究者に対するインタビュー調査がある。「大正デモクラシー」研究は、戦後の思想史学のなかで最も重要な領域の一つであり、これまで多くの業績が積み重ねられてきた。インタビュー調査を通して、研究者の思想的背景と研究が進められた時代状況に関する理解を深めることは、戦後思想史の成果と課題を検討するうえで大いに役立つ。飯田氏への聞き取りは、その第3回として行われた。なお、第1回として行われた松本三之介氏への聞き取りは、田澤晴子・平野敬和・藤村一郎「松本三之介氏インタビュー記録——日本政治思想史をふり返る」(本誌第47巻第4号、2018年2月)、第2回として行われた三谷太郎氏への聞き取りは、同「三谷太郎氏インタビュー記録——『大正デモクラシー』研究をふり返る」(本誌第48巻第2号、2018年8月)として発表した。

飯田泰三氏は1943年山口県生まれ。1971年東京大学大学院法学政治学専攻科博士課程修了。現在、法政大学名誉教授、鳥根県立大学名誉教授。「大正デモクラシー」の思想研究を牽引してきた研究者の一人である。飯田氏は、日本政治思想史研究の分野において、長谷川如是閑・吉野作造など、大正期の知識人に関する研究を進めるとともに、丸山眞男・藤田省三など、戦後の知識人に関する研究も発表してきた。著書には、『批判精神の航跡——近代日本精神史の一稜線』(筑摩書房、1997年)、『戦後精神の光芒——丸山眞男と藤田省三を読むために』(みすず書房、2006年)、『大正知識人の思想風景——「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』(法政大学出版局、2017年)、編書には、『北東アジアの地域交流——古代から現代、そして未来へ』(国際書院、2015年)がある。

このインタビューは、飯田氏が研究を志した時期の話に始まり、博士学位論文の執筆の背景(前掲『大正知識人の思想風景』)、吉野作造研究へと展開した際の問題関心について述べる。そして、丸山眞男論、アジア論へと進んでいる。その内容は、「大正デモクラシー」研究の成果と課題を考えるうえで、貴重な資料となるであろう。本誌

に掲載した理由として、松本氏と三谷氏への聞き取りと同様、このインタビューの編者が所属した同志社大学人文科学研究所第19期（2016～2018年度）第8研究の研究課題「転換期のデモクラシー——『戦後民主主義』に関する歴史的・理論的研究」との関わりがある。その研究は「戦後民主主義」を近代日本の民主主義の展開のなかに位置づけることを課題としており、このインタビューの編集はその研究の成果の一部でもある。なお、本文中の（ ）は飯田氏が注記として挿入したものである。また、〔 〕は編者が注記として挿入したものである。

（平野敬和）

1 東京大学法学部・大学院時代の課題と関心

【田澤】飯田先生の大学・大学院時代の問題関心について教えてください。

【飯田】私の最初の本『批判精神の航跡——近代日本精神史の一稜線』筑摩書房、1997年〕の「あとがき」で、「高校生の頃以来のニーチェへの関心、また大学二年の頃以来のカントへの関心からしても、『文明批評』とか『批判精神』というものに、無意識のうちに惹きつけられていたらしい」〔335頁〕と書きました。修士論文で高山樗牛〔1871-1902〕論を書いたのも、その意味でのニーチェへの関心から来ている面があります。樗牛は、1889年以来狂気に陥っていたニーチェが1900年に死んで、あらためてドイツでもてはやされているのに注目し、「文明批評家としての文学者」〔『太陽』1901年1月号〕を書きました。以後、それまでの「日本主義」と帝国主義賛美から大転換し、「美的生活を論ず」〔『太陽』1901年8月号〕というセンセーショナルな評論を書いて、石川啄木〔1886-1912〕にいわせると「自然主義運動の先蹤」〔『時代閉塞の現状』1910年〕となったわけです。

私が修士論文で樗牛を取り上げた動機については、同じ「あとがき」で次のように書きました。「一九六七年、修士論文に『明治後期の自我と国家——高山樗牛の政治思想』というテーマを選んだとき、丸山（眞男）先生〔1914-1996〕に報告した手紙の中で、本当は福沢諭吉〔1834-1901〕か中江兆民〔1847-1901〕、あるいは長谷川如是閑〔1875-1969〕か吉野作造〔1878-1933〕をやりたいのだが、時間的に間に合わなくなり——つまり、テーマが論文提出締め切りの2カ月前になっても決まらず——、「樗牛全集数冊だけ目を通せば書けそうな、こういうテーマにしたことを覚えている」〔335頁〕。

また、「かねてより如是閑の『ある心の自叙伝』の、ニヒリスティックで不決断・無為にすごされた青年期の記述に魅かれ、愛読していたこと」〔同上、335頁〕とあるように、私自身が大学時代、うつ病のような状態にあって、如是閑の青年期に共感していました。

東大法学部に在籍していた20～23歳の時期は、私の人生で一番不愉快な時期だったともいえます。要するに、「人は何のために生きるか」わからなくて、何もせずに鬱々としていたのです。

【田澤】飯田先生の修士論文の内容を教えてくださいませんか。

【飯田】修士論文（手書き）は、コピーを2部提出したものが東大の中央図書館（当時）と法学部研究室に残っているはずですが、手元にあった原本（当時母親が清書してくれたもの）は誰かに貸したまま戻ってきていないらしく、その内容はぼんやりとしか思い出せません。福田敏一先生〔1923-2007〕主宰の「政治理論研究会」でその内容をもとに報告した際のノートが残っていますが、問題提起的な性格のもので、修士論文で展開した議論自体については、やっぱり復元不可能です（苦笑）。

【田澤】東京大学ではどのような講義を聴きましたか。

【飯田】本郷の法学部に進んでからは、とくに4年生になって以後、先ほどいったようにウツ状態で、授業はほとんど出なかったのですが、駒場の教養課程では、とくに2年次、外書講読やゼミはいくら取ってもよかったので、熱心に大学に通い、外書講読では、エンゲルス『フォイエルバッハ論』、キルケゴール『おそれとおののき』、ツヴァイク『昨日の世界』などを読みました。他方ゼミの方では、松島静雄〔1921-2007〕という若い社会学の先生がやっていたマンハイム『イデオロギーとユートピア』を読むゼミや、京極純一先生〔1924-2016〕がやっていたリースマン『孤独なる群衆』（まだ邦訳は出ておらず、ペーパーバックのアブリッジ版で）を読むゼミのほか、倫理学の佐藤俊夫〔1921-〕という先生がレクラム文庫（ドイツ語）で読んでいたカント『道徳形而上学原論』のゼミにも出ました。

実は中学3年以來、高校にかけて、本ばかり読むようになり、パスカルの『パンセ』やニーチェのもの、たとえば『華やかな智慧』——これは『ツアラトウストラ』よりすばらしい作品だと当時私は思いましたが——などを愛読しました。

鉄道管理局勤務の父の転勤により、私は下関で生まれ、盛岡、熊本、そして鳥根県那賀郡都野津町（現江津市、父の出身地）と移り、そこで小学校1、2年を過ごし、その後、米子、姫路を経て、小学4年から中学2年までは5年間、四国の高松にいました。そして父が最後の勤務地、千葉鉄道管理局に転勤し、中学3年の時、江戸川区の松江三中に転校しました。しばらくは友達もいないため、学校の帰りに新小岩駅前の白天堂という本屋で文庫本を買って、ニーチェなど読むようになったわけです。

小説はドストエフスキーの『罪と罰』などを読んでいました。ついで高校生の頃は、ド

ストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』『白痴』『未成年』『悪霊』のほか、ロマン・ロラン『ジャン・クリストフ』『魅せられたる魂』、ヘッセ『ペーター・カーメンチント』、トーマス・マン『魔の山』、サルトル『嘔吐』、カミュ『異邦人』『シジュポスの神話』、ブルースト『失われた時を求めて』（一部のみ）、ミッチェル『風と共に去りぬ』、トマス・ウルフ『天使よ故郷を見よ』、スタインベック『怒りの葡萄』、メルヴィル『白鯨』、ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』、トルストイ『戦争と平和』、ショーロホフ『静かなドン』等々。

ですから、カントとかヘーゲルを読むのは大学時代になってからで、その前にニーチェなどから入ったわけで、歴史的順序からすれば逆ですが、日本近代の西欧思想受容の順序とは合っているわけです。

子供の頃から転校続きだったので、友達ができるまでよく本を読んでいたのです。というより、友達仲間に入る前に、本のなかの世界があったわけで、渡辺京二〔1930-〕風にいうと（「桃から生まれた桃太郎」ならぬ）「本から生まれた本太郎」だったわけです。小学校1年の時のスピリ『アルプスの少女』、2年の時のバーネット『小公子』、3年の時のデュマ『三銃士』、キップリング『ジャングル・ブック』、4年の時の『ニーベルンゲンの宝』（岩波少年文庫）などで、ほとんど翻訳物の『世界名作全集』（講談社）の類でした。

【平野】丸山眞男との出会いはどのようなものでしたか。

【飯田】大学に入るまで日本の本はほとんど読んだことがなく、高校の時は、理科系のクラスにいたせいもあって、丸山眞男という名前も知りませんでした。1961年、大学に入ってから生協書籍部で、出たばかりの丸山さんの『日本の思想』〔岩波新書、1961年〕を手にしたのが出会いです。私の場合は『現代政治の思想と行動』〔上下巻、未来社、1956-57年〕よりも先に、『日本の思想』から丸山さんの著作にふれたわけです。もっとも、『現代政治の思想と行動』はその後すぐに読んで、注の一つ一つまで愛読しましたけどね。

法学部に進んだら、大教室の講義で、しかも教科書やそれに準ずる本を書いている先生が多く、試験前に集中的にそれを読めばいいと、ほとんど授業には出ませんでした。ただし、丸山先生の「東洋政治思想史」は、先生が一度も書かれたことのないことをしゃべるので、毎回出て、必死でノートを取りました。

もう一つ出たのは片岡輝夫先生〔1924-〕の「ローマ法」で、この先生はまだ本を一冊も書かれていないので出たところ、ローマ史を踏まえながら語る面白い講義でした。ところが、公務員試験などには無関係な教科のためか、学生があつという間に5～6人に

なり、いわば義憤を感じて出ていたら、夏休み前に先生にその出席者5名ほどが誘われて、正門前の「白十字」でお茶をご馳走になるということもあり、結局「ローマ法」も全回、出ました。

そのほか、複数回、出たのは、篠原一〔1925-2015〕「西洋政治史」、坂野正高〔1916-1985〕「東洋政治外交史」、隅谷三喜男〔1916-2003〕「労働経済論」（法学部では「社会政策」の科目名で登録）、川島武宜〔1909-1992〕「法社会学特別講義」くらいでしょうか。

高校（両国高校）では理数系のクラスだったので、物理学や数学が得意科目で（日本史や生物学など暗記科目は苦手を取らなかった）、哲学を志望していましたが、父の病気（3年の時、腎臓ガンが見つかり、片方を摘出）や家族（母と妹2人）の生活を考え、クラス担任の先生（世界史担当）から東大法学部に行くことを勧められ（いわゆる「ツプシが利く」から）、「文一」を受験したのです。それまでは法律にも政治にも全く関心がなく、政治を対象とした学問なんて成り立つのだろうかと思っていただけでした。それが丸山先生の学問と出会うことで、政治学への関心をもつようになったのです。

しかし研究者になるということは全く考えていませんでした。父親の病気のことがあったからです。ところが父親のガンは結局転移することなく、国鉄退職後も二度勤め先が見つかり、私が卒業後すぐ働くという必要はなくなったのです。しかし学者になるということは、身近にそういう存在がいなかったこともあって、思い浮かばなかったのです。

しかも鉄道省から戦後国鉄に勤務した役人の父のような「サラリーマンの悲哀」は味わいたくないという気持ちがずっとあり、4年生の時は就職活動をせず、授業も取らず、2カ月に1回、大学に行くくらいになっていました。夏休み前に大学の事務に何かの書類を出せと呼び出されたおり、本郷三丁目でもたまたま会った語学クラスの同級生（内田富雄君〔1942-〕、のち外務省に入り、スウェーデン大使など務めた）が、「みなは就職活動で目の色を変えているのに、君は何をしているんだ」と声をかけてきました。「何もしたくないので、何もしていない」と答えると、「ちょっと喫茶店に入ろう」といって、そこでアドバイスをしてくれたのです。「（『デモシカ教師』という言葉があるが、）君は学者になるシカない『シカ学者』だよ！君は丸山眞男の話ばかりしていたけれど、丸山ゼミには出ているのかい」、「ゼミ募集の掲示を見ていなかったのだから、出ていない」、「じゃあ、先生に嘆願の手紙を書いたらいい」というのです。

そのアドバイス通りに手紙を出したら、間もなく先生から返事があり、研究室に呼ばれて行くと、「君のことは全く知らないわけだから、夏休み中に小論文を書いて提出し

なさい。それにより判断する」といわれました。「何について書きましようか」と問うたら、ヘルマン・ヘラーの“*Staatslehre*”（『国家学』）をまず勧められましたが、邦訳がないだけでなく、英訳もなく、私はドイツ語は一応読めるが1カ月では到底無理だと断ると、当時一部翻訳されていたホブズの『リヴァイアサン』を提案されました。そこで、丸善（東京駅近くの）でエヴリマンズ・ライブラリー版を買ってきて、『リヴァイアサン』における人間像の転回と政治理論」というものを書いて送ったところ、夏休み明けにまた研究室に呼び出され、「面白かったが、ちょっと趣味的（哲学好み）だね」といわれました。

こうして、「内部選考」（法学部出身者は、「優」の数が半分以上であれば、試験なしの面接のみの選考。この制度は東大紛争ののち廃止）で大学院に残ることができたのです。

丸山さんは60年安保でオピニオン・リーダー的役割を演じた後、2年間欧米に行かれ、1963年に戻ってくると、「東洋政治思想史」の講義（私が受講した講義）で「原型」論（後の「古層」論）を始められたわけです。そこで『古事記』から鎌倉仏教を扱っていましたが、私も日本の古典を読むことになりました。親鸞〔1173-1262〕の『歎異抄』など、初めて読んで強烈な印象を受けました（2年の時に読んだキルケゴールへの感銘などと重なって）。

1968年「東大紛争」が起こり、1969年3月に丸山さんが倒れ（肝臓疾患）、大学院の授業だけを自宅を始められました。頼山陽〔1870-1882〕の『通議』、ついで翌年は藤田東湖〔1806-1855〕の『弘道館記述義』という漢文テキストを読むゼミで、最初にメンバーが交代で白文を音読（素読）し、続いてその日の報告者が報告した後、先生がコメントとご自身の解説をされるという形で、3、4時間も続いたでしょうか。途中、奥さま〔丸山ゆかり、1922-2010〕からお茶とお菓子の差し入れがありました。

『通議』が終わった時にゼミ合宿があり、岩波茂雄〔1881-1946〕の造った熱海のせきれき惜櫟荘に行きました。そこで丸山さんと温泉と一緒に入った時、草津節をドイツ語で披露してくれました。旧制一高の寮生が歌っていたものということで、「クサツ、グーテ・ブラッツェ、コンメン・ジー・ピッテ、アインマール、ドッコイショ」で始まるのですが、その時一緒にお風呂に入った宮村治雄君〔1947-〕は、ひょっとして全部覚えているかも知れません。

【田澤】東大紛争の時はどのように過ごしていましたか。

【飯田】大学院進学が決まった後も、ウツ状態が続き、最後の期末試験の時、受験に出かける気力が起こらず、留年しましたが、その留年中（1965年）、大学紛争のハシリのよう

なものだったのでしょうか、図書館前で何か学生と職員でモメているのを見物していたところ、後ろから肩をたたかれました。ふり返ったら丸山先生がいて、「君は生きていたのか」といわれました。

ところが、今から考えると、私のそのうつ病は、東大紛争〔1968-69年〕により完全に治ったのです。大学院に進んでからは、うつ状態からは一応脱して、ゼミにも出て、院生たちと研究会をやったり、そして修士論文を何とかでっち上げたりしたのですが、まだ完全な回復というところまでは行っていなかったのです。そこに東大紛争が起きました。

全学闘争となる以前の医学部紛争の段階では、「青医連」のテントに籠もっている学生を激励しに行ったこともあります。6月の医学部全学闘による安田講堂占拠と機動隊導入による排除を転機に、紛争が全学闘争に広がってからは、私は距離を置いて、しかし熾烈な関心をもって、見守るという位置を取りました。私は当時ふざけて（「全学連」ならぬ）「見学連」と称して——要するにやじ馬で——、たとえば中核派が、いわゆるゲバ棒を使って武闘訓練を始めた現場を見に行ったりしました。

結局のところ「大学闘争」とは、世間とは無関係の、大学のなかだけの革命運動のようなものだったのですが、しかし私にとっては、それを身近に見ることによって「政治」とは何かということを初めて理解することができたような気がする、貴重な経験になったと思います。その頃読んでいた、文学に描かれた政治の世界——ツヴァイク『ジョゼフ・フーシェ』、スタンダール『パルムの僧院』、ドストエフスキー『悪霊』、オーウェル『1984年』、ジョン・ル・カレ『寒い国から帰ってきたスパイ』等々——が身に迫ってわかるような気がしたのです。それに何よりも、毎日のように全く予期していなかった事態が目の前で展開するというのは、世の中にこんな面白いことがあったのかという感じで、それでうつなど吹っ飛んだわけです。

しかし私の場合、「大学闘争」は「自分の問題」ではありませんでした。なんせ法学部に進学してからうつになって、本郷キャンパスにはめったに行かないという状態になっていたわけですから。その意味では私の場合「大学闘争」は、M・ウェーバーのいう「知的関心者のディレッタントイズム」の対象でしかなかったともいえます。

また、いつもはしゃべらない近所の八百屋の青年（たしか私と同一歳）が東大紛争の際、ニコニコしながら「東大も大変ですね」と声をかけてきたことが印象に残っています。60年安保の時、岸信介首相〔1896-1987〕がいった「今も後楽園球場は人でいっぱい。国会前に来ているのはわずかだ。多くの声無き声は実は我々を支持している」との

言葉に反撥して、「声なき声の会」（街頭に出る「市民運動」の最初）が立ち上がりましたが、この（広義における）「知識人と大衆」の問題は——当時それは「全共闘」「民青」と「一般学生」の問題でもあったのですが——、現代まで続く重要な問題だと思います。

ただし、「知識人」という言葉など、学会や評論の世界には残っていても、今や完全に死語となっているわけです。つまり、誰も自分が「知識人」だとはいわないし、自分が「知識人」だと思っていない。J・S・ミルが「全てについて何事かを知っており、何事かについて全てを知っている」といった意味での「知識人」は、存在しなくなったのです。そして、当時の全共闘の「専門バカ」（＝「バカ専門」）批判に対して、私は「せめてなりたや専門バカに」と嘯っていたのですが、気がついてみると、あっという間に、どの学問分野でも、「それは私の専門ではないからわかりません」と平然といて、それを恥ずかしいと思わない学者ばかりの世界になってしまったわけです。

なお、私は大学院生連絡協議会大学院問題委員会報告『法学政治学 研究者養成制度の問題点』〔1969年4月発行、〔委員〕雨宮昭一・荒木伸怡・飯田泰三・岩間昭道・大嶽秀夫・佐藤明夫・戸松秀典・六本佳平〕というものに、「研究者養成の理念」と「結語」の部分を書きました。M・ウェーバーなどを下敷きにして「職業としての学問研究の理念」を論じた後、「研究者養成制度の理念」を考えるためのミニマムな原則として、①普遍主義、②固有のスタンダードの存在、③内発性の尊重、④訓練の必要等を挙げて論じたものです。丸山先生からは、「君の書いた『理念』の部分には大体異存はないけれども、その後の東大法学部の現状を踏まえての『二元制度の問題』『大学院における研究者養成制度の問題』の部分（六本佳平氏〔1939-〕執筆）については、まだ議論すべき点が多々あり、またその問題点に対して実際にどうするかが問題だ」といわれた記憶があります。

また、1969年7月、大管法（大学の運営に関する臨時措置法、同年8月3日、参議院本会議で抜き打ち可決、成立）反対闘争で、この院生連絡協議会大学院問題委員会のメンバーを中心に、20人ほどで文部省にデモをしたことがあります。全共闘でも民青でもないグループのデモということで珍しかったのか、文部省の建物の2階、3階の窓が開いて、何人か顔を出していました。私は「帝國大學解體」という旧漢字で書いたプラカードを作って参加しました。

なお、先ほどいい落しましたが、大学院での丸山先生の演習は、私が修士に入った1966年度は、M・ウェーバー『宗教社会学』の後半を読んでいました。同書は当時まだ邦訳が出ていなくて、ドイツ語の『経済と社会』の該当の章を参照しつつ、英訳版（T・パーソンの序文付き）で読んだのです。翌年からは一転して、江戸期のものがテキストにな

り、1967年度は伊藤東涯〔1670-1736〕の『古今學變』と荻生徂徠〔1666-1728〕の『太平策』、1968年度は太宰春台〔1680-1747〕の『經濟録』でした。そしてその後は、前にふれたとおり、1969年度が先生宅での頼山陽の『通議』、1970年度が藤田東湖の『弘道館記述義』となるわけです。

そのほか、私が出ていた諸先生の大学院の演習で読んだのは次のようなものです。

石田雄先生〔1923-〕: Guido de Ruggiero, Tr.by R.G. Collingwood, *“The History of European Liberalism”*。福田歛一先生〔1923-2007〕: Jean-Jacques Rousseau, *“Du Contrat social, ou principes du droit politique”*。篠原一先生: William Sheridan Allen, *“The NAZI Seizure of Power, The Experience of a Single German Town 1930-1935”*。斎藤眞先生〔1921-2008〕: Richard Hofstadter, *“Social Darwinism in American Thought”*。岡義達先生〔1921-1999〕: Erving Goffman, *“Behavior in Public Places, Notes on the Social Organization of Gatherings”*。林茂先生〔1912-1987〕: 『保古飛呂比——佐々木高行日記』, 『田健次郎日記』。

【田澤】 東大紛争での経験と博士学位論文における大正知識人論とは関係がありますか。

【飯田】 この本〔『大正知識人の思想風景——「自我」と「社会」の発見とそのゆくえ』法政大学出版局、2017年〕の「まえがき」は、ヘーゲルの『精神現象学』〔1807年〕を引き合いに出して、近代日本の「意識の経験の学」としての思想史叙述ができないか、というところから始まっています。だいたい「まえがき」というのは本文が書き終わってから書かれるのが普通で、私の場合もそうだったんですが、短時間でそれを書くのに、大学紛争中に毎週1回、友人の雨宮昭一君〔1944-〕と読んでいた『精神現象学』を使うことを思いついて、一息で書いたように覚えています。

それは東大紛争のピーク時、何かあると（全共闘と民青の衝突など）ヘリコプターが上空を旋回し始めるので、何かありそうな日の前日に、東大近くの白山の雨宮君の下宿で『精神現象学』を読む会をやって、その晩そこに泊まり込んだこともあります。ヘリコプターの旋回する音が聞こえたら大学へ駆けつけようというわけです。ともかくそうやって、いわば緊張感をもって『精神現象学』を読んだ印象は格別で、その後いくら読んでもあの頃のような感銘を受けたことはありません。

精神現象学とは「意識の経験の学」で、それは「否定の弁証法」（アドルノ）なんだけれども、これを読んで全共闘の連中がいう「自己否定」がいかにかヘーゲルのそれとは違うかを実感しました。また私は修士論文の高山樗牛論で、その「ロマン主義」のあり方を批判するところに一つの軸を置いたのですが、当時の全共闘の主張のなかに「心情口

マン主義」に通ずるものを感じ（三島由紀夫〔1925-1970〕との「対話」など）、その点で、ヘーゲルの「現実的」⇔「合理的」の弁証法からするロマン主義批判に共鳴したということもあります。

2 『大正知識人の思想風景』とその周辺

【田澤】『大正知識人の思想風景』を執筆された際の思想課題について教えてください。

【飯田】鹿野政直さん〔1931-〕（『大正デモクラシーの底流——`土俗、的精神への回帰』日本放送出版協会、1973年）、松尾尊兌さん〔1929-2014〕（『大正デモクラシー』岩波書店、1974年）、金原左門さん〔1931-2018〕（『大正期の政党と国民——原敬内閣下の政治過程』塙書房、1973年）が同時代にお仕事をされているのは知っていましたが、実は私の場合、「大正デモクラシー」に関心があったわけではありません。まず『大正知識人の思想風景』という題名は今回つけたもので、もともとのタイトルは「大正知識人の成立と政治思想——『文明批評家』の場合を中心に」というものです。つまり「大正知識人」の「成立期」だけを問題にしようとしていたわけです。

この成立期においては、「自我」意識の目覚めとか「社会」の発見という問題があって、それが昭和の思想状況と関連していることを、本書322頁の図で明らかにしています。この図の実線部分——「社会」の《実証的対象化傾向》と、「自我」の《内面的主体化傾向》——は、展開・発展・進化の方向を意味し、破線部分——「自我」と「社会」の《ロマン的合一化傾向》——は、陥没・退行の方向を示します。この陥没・退行傾向は、その先の「ロマン的・心情的共同体」に帰結します。一方その前にある〈昭和マルクス主義〉は、「自我」の《内面的主体化》と「社会」の《実証的対象化》という二つの発展・進化の傾向をアウフヘーベンするものとして、出てきたのです。このイメージが最初にあって、論文を書いたのです。

つまり、最初から、大正初期と昭和マルクス主義をつなぐものは何かという問題関心があり、その間にある「大正デモクラシー」は直接扱わない。すなわち、博士論文では吉野作造を論じなかったわけです。なお、吉野作造と「大正デモクラシー」論については、小松茂夫・田中浩編『日本の国家思想（下）』（青木書店、1980年）に収められた一章、「吉野作造——“ナショナル・デモクラット”と『社会の発見』」で論じました〔飯田『批判精神の航跡』所収〕。

当時私が意識していた思想的課題は、なぜ昭和初期に一方でマルクス主義、他方で

北一輝〔1883-1937〕などの国家社会主義が猛威を振るうことになったのかということでした。それに対して、デモクラシー（いわゆるブルジョワ・デモクラシー）から社会主義へという、いわゆる段階論的な議論ではなく、《内面的主体化（人格化）》と《実証的対象化（社会化）》の二方向の分化と、それを統合するものとして〈昭和マルクス主義〉（世界観ならびに社会科学としての）があると考え、その媒介項として、「人格主義」「文化主義」や、生物進化論を踏まえた社会学の動向を置いたのです。他方、それは「ロマン的共同体」と短絡的に結合すること（《ロマン的合一化》）によって、〈昭和ファシズム〉へとつながっていくという構図を思いつき、論文を構築したのです。

なお、322頁の「参考付図」にミスがありました。手書きのものを印刷に回したのですが、校正で見落したのです。〈昭和マルクス主義〉の下にある「心情的共同体」は、その3行下の〈昭和ファシズム〉の上に移し、そこに向かって「人格・文化」と「社会」からの破線が伸びる、という図に訂正してください。

博士論文の第二篇「基本動向における分化とその特質」の最初の章で、「“レーベン問題”の興起」ということを論じました。ドイツ語の *Leben*、英語の *Life* は、いずれも「生きる」(*leben*, *live*) の名詞形です。訳語としては「生」ですが、それがいわば分化したものとして、「生活」「生存」「人生」「生命」等があるわけです（「参考付図」参照）。

これは野村隈畔〔1884-1921〕が『現代の哲学及哲学者』（京文社、1921年）において、「『生命とは何ぞや』といふ問題」が「最近において一般思想界の知識欲と好奇心を最も多く刺激したものの一つ」だといいつつ、当時の哲学および哲学者たちを「生命派」（永井潜〔1876-1957〕・福来友吉〔1870-1952〕ら）、「価値派」（田中王堂〔1868-1932〕・桑木巖翼〔1874-1946〕・左右田喜一郎〔1881-1927〕・米田庄太郎〔1873-1945〕ら）、「体験派」（西田幾多郎〔1870-1945〕・田辺元〔1885-1962〕ら）の三傾向に分けて論じていたのに、ヒントを得たものです。

ちなみに、しばらく前に鈴木貞美〔1947-〕という人が「大正生命主義」というものを主題にして本を書きました（『「生命」で読む日本近代——大正生命主義の誕生と展開』NHKブックス、1996年、など）。意味のある仕事だと思いますが、私は「レーベン」問題興起の位相を「生命主義」として括ることに反対です。「参考付図」で示したように、「生命」概念は「ロマン的合一化」の方向で「心情的共同体」へと“陥没”して行き兼ねないからです。

ところで私は、「“レーベン問題”の興起」という位相は、「明治ナショナリズムの解体」のなかから起こってくるという構図を示しました（「参考付図」参照。「国家」が解体し

て、その基底にあった「生活」「生存」「人生」「生命」の位相が隆起してくる)。その「明治ナショナリズムの解体 (disintegration)」という概念は、生田長江〔1882-1936〕と土田杏村〔1891-1934〕の著作からヒントを得たものです。

ともに大正という年号が終わる年〔1926年〕に著わされた、長江の「明治文学概説」〔『日本文学講座』新潮社〕と、杏村の『日本支那現代思想研究』〔第一書房、ロンドンの書店から刊行された“*Contemporary Thought of Japan and China*”の邦文版〕です。博士論文の第一篇第一章「明治ナショナリズムの解体と大正知識人の成立——問題の起点」の「二 同時代者から見た“大正知識人の成立”」で紹介しました。

長江は、「明治維新 (或は革命)」の「根本動機」は狂熱的な「対外的愛国心」の覚醒にあり、その「対外的愛国心」が日露戦後までの半世紀間、日本人の生活を指導し、支配してきたといいます。それが日露戦争後、「憂国の緊張」に「弛みと疲労」が見え、資本主義化が本格化し始めるとともに、「対外的愛国心への反動」としての「個人主義的自我主義的近代思想」が勃興するというのです。そして、「自然主義よりプロレタリア文学迄」という副題のついた「大正文芸史概観」が、同時期に書かれます。

杏村の場合は、明治20年代までの日本人の努力を指導した精神を「ナショナル・ロマンチズム (国民的浪漫主義)」と名付けます。「日本の民衆は、よく其の国家の独立を維持しつつ出来るだけ其の後れて居る物質的文明を進歩せしめる」ために、「外来の文明を出来るだけ早く消化し、国家的に大きく生長しようとする要求」としての「国民的浪漫主義」で動いたというのです。ところが日清戦争勝利によって、その国民的浪漫主義が「一つの外形を得た」ことになり、また資本主義による産業的発達も次第に進んだものになって来たので、「以後の日本の思想界は、国家の専制的拘束力から先づ個人を解放せしめ、その個人をして又再び国家とは違つた社会の統制下へ自らを所属させる方向へ進めしめた」というのです〔『大正知識人の思想風景』28-29頁〕。

『日本支那現代思想研究』の「日本」に関する部分は、以上の「序論」を受けて、「進化論的哲学」と「理想主義哲学の発達」が明治思想史との関連で略述され、その後、「新カント主義と新ヘーゲル主義」と題する「講壇哲学者」たちの思想の検討、および、「文明批評と社会思想」と題する「文明批評家」たちと社会主義者たちの思想の検討がなされる中心部分が続くのです。そして、「新カント主義と新ヘーゲル主義」においては、桑木巖翼、西田幾多郎、田辺元、西晋一郎〔1873-1943〕、紀平正美〔1874-1949〕、左右田喜一郎、波多野精一〔1887-1950〕らが取り上げられ、さらに、「文明批評と社会思想」においては、田中王堂、杉森孝次郎〔1881-1968〕、阿部次郎〔1883-1959〕、北吟吉〔1885-1961〕、

金子筑水〔1870-1937〕、長谷川如是閑、室伏高信〔1892-1970〕、河上肇〔1879-1946〕、大杉栄〔1885-1923〕らが取り上げられています。

実は私が「『文明批評家』の場合を中心に」という副題をつけて「大正知識人の成立と政治思想」を論ずることにしたのは、この土田杏村の論が大きなヒントになったといってもよいのです。もちろん、内容的な論理構成等には、まったく影響を受けていませんが。

また、「明治ナショナリズムの解体」という視角で論を立てるにあたっては、丸山先生の「明治国家の思想」〔もと、1946年10月、歴史学研究会主催講習会「日本社会の史的究明」で話したもの。のち、歴史学研究会編『日本社会の史的究明』岩波書店、1949年、所収〕が、いわば下敷きとしてありました。先生は明治ナショナリズムの「解体」という言葉は使っていないのですが、日露戦争あたりを境に、明治のナショナリズムが当初もっていた自由主義や民主主義との結合を失い、決定的に“変質”していくと見たのです。その結果、「国民思想は一方には個人的内面性に媒介されないところの国家主義と、他方には全く非政治的な、つまり星や堇花を詠い、感覚的本能的生活の解放に向かうところの個人主義という二者に分裂して相互が無媒介に併存する様になる」〔『丸山眞男集』第4巻、岩波書店、1995年、81頁〕というのです。

ともあれ、こうした「明治ナショナリズムの解体」のなかから「自我」と「社会」の発見があり、それが自我の《内面的主体化》と社会の《実証的対象化》の方向で深まっていくなから大正知識人の諸思想風景が生まれる、というのが本書で示そうとした構図です。

3 吉野作造研究について

【藤村】ご高書〔『大正知識人の思想風景』〕にある「新カント派」「新ヘーゲル主義」とは、どこまでを含むカテゴリーでしょうか。たとえばオックスフォード学派のT・H・グリーンや、ホブハウスでは、どちらもそれに当たるでしょうか。さらに吉野は「新カント派」に含まれるのでしょうか、ご教示ください。

【飯田】吉野と新カント派との関係については、吉野が阿部次郎や土田杏村など新カント派の影響を受けた「理想主義の立場の鼓吹」へ共感を示していること（「理想主義の立場の鼓吹——阿部次郎君の『人格主義』を読みて」『文化生活』1922年9月）、および、「予の一生を支配する程の大いなる影響を与へし人・事件及び思想は何か」を『中央公論』の

アンケート調査で訊かれ（1923年2月）、「嗚呼がましいがカントと云ひたい」〔『吉野作造選集』第12巻，岩波書店，1995年，21頁〕と答えている（ただし，このアンケート回答が翌年の著書『斯く信じ斯く語る』〔文化生活研究会，1924年〕に収められた時には，「をこがましいが莊子と云ひたい」と改められた。これについては，飯田『批判精神の航跡』262頁，参照）ことから，吉野を一応新カント派的立場であると考えました。

【藤村】飯田先生が吉野についてご報告された研究会〔丸山眞男『吉野作造の政治思想 July 1, 1978 飯田泰三』研究会報告メモ，東京女子大学 丸山眞男デジタルアーカイブ所蔵〕は，どのようなもので，どういった報告がなされていたのでしょうか。その研究会について，印象的なことがありましたらご教示ください。

【飯田】それはVGの会〔比較精神史の会〕とって，西欧政治思想，ドイツ宗教改革研究者の有賀弘さん〔東大名誉教授，1933-2013〕たちがドイツ語のエルンスト・トレルチ『キリスト教会およびキリスト教集団の社会教説』〔Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1912.〕という本を読み翻訳するために立ち上げたものです。実際には出版されませんでした，ヨーロッパ，中国など様々な分野の政治思想研究者が集まった会でした。1960年代に私は会の幹事として開催の葉書を出す役目をしました。丸山先生に吉野の論文を見せたらVGの会でしゃべれということになり，「政治と倫理」を中心に報告しました。この点は吉野論の最後に注でかなり詳しく書きました〔飯田『批判精神の航跡』218-220頁〕。吉野における客観的規範の創成者＝立法者，施行者＝行政者の議論における立法者の概念が，ルソーの人民主権と同じではないかという点を論じています。そして「客観的規範の創成者」たる「全民衆」という観念がフィクションに終わらぬよう二段階の論を立てており，民衆は政党に属することなく判定者となるべきだという議論をしています。ここにはカント的思考が見られます。

吉野は1919，20年の段階まではナショナル・デモクラットであり，国家と社会を区別しませんでした。それはヘーゲルからの影響，有機体的国家観によるものですが，その後はっきり変わり，それを私が「社会の発見」と名付けました。なお経済学者福田徳三〔1874-1930〕その他の人々が，同時代のこの時期について「社会の発見」と称していたこともあります。そういうことで出発点となる博士論文では吉野を対象から外しましたが，そもそも吉野に対する関心が大学院時代からあって，その後の吉野論につながっています。

【藤村】丸山の残した草稿類や手書きメモ〔東京女子大学 丸山眞男デジタルアーカイブ所蔵〕には吉野について言及したものが残されています。たとえば，先にふれた『吉野作

造の政治思想 July 1, 1978 飯田泰三』研究会報告メモ」, または「政治学と倫理学との提携」〔草稿類〕, あるいは現在インターネットで公開されていない「日本における政治学の発達 (早稲田大学講演) 草稿断片」〔1947年〕があります。とくに最後に挙げた資料には「政治学と倫理学の結合」と記されています。丸山の「政治学と倫理学との提携」という文言は, どのような含意があるのでしょうか。丸山の吉野観をどう解釈すればよいのかうかがいます。

【飯田】実は私はこの原稿は見えていないのです。とにかく, 先生は研究会で克明なメモを取るのですね。丸山さんは一方で如是閑, 他方で南原繁〔1889-1974〕からの影響を受けていて, 南原さんは「君はしょっちゅうヘーゲルというが, ヘーゲルは状況が変われば流されるんだから危ない, 一方でカントは独立している」といていたそうです。丸山さんの緑会懸賞論文〔「政治学に於ける国家の概念」『緑会雑誌』第8号, 1936年12月〕についても, 南原先生がヘーゲル・マルクスのな弁証法を認めないということを丸山先生はよくわかっていました。南原さんは新カント派というよりカントそのものなんですね。丸山先生はそれを横で見ながら学問を構築していったわけです。

それから, 倫理学との提携ということを強調するのはなぜかという点ですが, マルクス主義の唯物論は倫理学を観念論だと否定するわけでしょう。吉野は理想主義だからそれを批判するわけですが, 丸山さんは唯物論にずっとコミットしているから理想主義をすぐには肯定しない。如是閑の文化主義批判に対しては痛烈なものがあります。ただ宗教の神を認めないという点については, 南原さんとの対話で聖なるものは認めるが特定の神は認めないというんですね〔丸山眞男・南原繁「戦後日本の精神革命——教育の課題として」『世界』1964年8月号〕。そのあたりと関係しています。

丸山さんの「福沢諭吉の哲学——とくにその時事批判との関連」〔『国家学会雑誌』第61巻第3号, 1947年9月〕の最後で, フォイエルバッハが宗教の一步手前まで行くギリギリのところでやっている, 福沢もそうではないかといっているのですが, それはまさに丸山さんの立場を投影しています。丸山さんは波多野精一の『宗教哲学』〔岩波書店, 1935年〕を愛読していて, フォイエルバッハについては波多野の著作から引いているらしいのです。

また, お母さま〔丸山セイ, 1884-1945〕が山口の人で浄土真宗に帰依していて, 親鸞には魅かれるけれども信仰にまではいかず, お別れの会の時にも無宗教になるわけです。宗教的なものを唯物論で否定するのではなく, なんらかの精神や理念が時代を動かす, これはウェーバーと同じで, 宗教社会学というんですが, 日常的なルーティーンの世界

が進行している場合、経済が世界を動かすが、非日常的な右か左かわからない分かれ道では宗教的な理念が「転轍手」となるということです。

【藤村】先に挙げた東京女子大所蔵の丸山メモのなかに「新カント派的立場」という語がありますが、飯田先生の言葉を写したのか、それとも丸山の認識なのかという点はいかがですか。

【飯田】私も報告のなかで吉野や阿部次郎らが共鳴している人格主義について、「新カント派」という言葉を使っていますが、丸山さんのなかでは南原さんの意味でカントを使っているのではないのでしょうか。カントは自分の哲学をつくっていましたが、「新カント派」は論争のなかでやりあっている印象で、マールブルク学派と西南ドイツ学派とは全然違うわけです。丸山さんはドイツ語の勉強をするのにヴィンデルバント、リッケルトを読んでいて、本富士署で一緒に拘留された、大塚久雄〔1907-1996〕の弟子、戸谷敏之〔1912-1945〕からヘーゲルの『精神現象学』を読みなさいと勧められたそうです。そのことは丸山さんが政治思想史をやるきっかけになったらしいですね。戸谷は東大入学も一高も取り消され、法政の予科に入り、大塚に会い、「大塚史学三羽鳥」となります。30歳でフィリピンに送られて、敗戦を知らず現地で襲撃されるのです。私が戸谷の弟〔戸谷富之、1916-2006〕に会いに行った時に、その時〔本富士署〕のことを紹介しています〔飯田『戦後精神の光芒——丸山眞男と藤田省三を読むために』みすず書房、2006年、111頁〕。

丸山さんも政治と倫理学の関係についてはかねてより関心があり、カント・ヘーゲル・マルクスの流れが頭にあり、倫理学や哲学を単なる上部構造とはしない考え方があったんでしょうね。

【藤村】丸山は他者感覚にいたるまでの人間論と倫理学、マルクス主義からは出てこない人格論に関心があったのでしょうか。

【飯田】たしかにマルクス主義は宗教をアヘンだとしていますが、ロシア革命では救済の予言をしているという意味では、唯物論といいながら宗教の役割をしているわけですね。マルクス自身はいろんな哲学を読んでいて、スピノザなども読んでいます。

4 丸山眞男のナショナリズム論について

【平野】丸山のナショナリズム論についてうかがいたいと思います。橋川文三〔1922-1983〕は『超国家主義』〔現代日本思想大系第31、筑摩書房、1964年〕の「解説」で、丸山の

議論に対して、「超国家主義」がどこから生まれたのか正面から問うていないと批判していますが、その批判の方向性について飯田先生はどのように思われますか。

【飯田】そもそも「超国家主義の論理と心理」〔『世界』1946年5月号〕を書いたのは1946年の3月から4月にかけてで、占領軍が使用しているウルトラナショナリズム、「超国家主義」という語を使いながら、日本のファシズム、天皇のファシズム国家を考えようとしているものです。橋川さんのいう大正時代の右翼少年たちを支えたものは何だったかという、それは伊藤隆〔1932-〕の『大正期「革新」派の成立』〔塙書房、1978年〕にあるような、「左翼の革新」と同質のものとして「右翼の革新」があったという問題にかかわりますが、丸山さんの世代になるとそのようなことがわからなくなっているのではないかと思います。丸山さんは1935年に大学に入っていて、満州事変は小学生ですから、その前の時期がわからないと「昭和ファシズム」という言葉は使い切れませんと思います。

丸山さんはその頃、ヨーロッパの思想のことで頭がいっぱいだったのです。丸山さんの出した緑会懸賞論文の1年前、大学2年生の時の論題は蠟山政道〔1895-1980〕が出題審査を担当して、デモクラシー論だったのですが、一高の同級生だった友人〔猪野謙二、1913-97〕と、宮城県と福島県の境にある越河村こすこうの臨濟宗のお寺に1カ月合宿して、ジェイムス・ブライスなどの英米の政治学を読んだのですが、とうとう論文は書けずに帰ってきたのです。2年生の時はドイツ国家学よりも英米流の政治哲学を色々読んでいたのではないですかね。籠ると決めた時すぐ新聞屋がやって来て、この村ではまだ2軒しか取っていないので取れといわれ、その時に親父さん〔丸山幹治、1880-1955〕の出身である長野県松代のような農民も政治の議論をしている信州と、東北との違いを実感して帰ってきたのです。

丸山さんの最大の問題点は、天皇制を共同体と関係させる——あれは藤田省三〔1927-2003〕の『天皇制国家の支配原理』〔未来社、1966年〕のパクリではないかと藤田さんの弟子たちがいっているようですが——、共同体の体験がゼロなんですね。安丸良夫〔1934-2016〕のような農村共同体に生まれて京都に行ってびっくりしたような感覚とは違うんですね。「車中の時局談議」〔『未来——芸術と批評』第2号、1948年12月〕などは全く知らない世界なんです。四谷の小学校の周りには被差別部落があり、そうした子供も知っていて、銭湯にも行ったことがあるので民衆の世界は知っているわけですが、農村共同体は知らないということです。

【平野】次に、丸山の「大正デモクラシー」評価についてうかがいたいと思います。丸山は明治前期のナショナリズムを高く評価していますが、「大正デモクラシー」への展開を

ほとんど論じていません。その点について、飯田先生はどのようにお考えになりますか。
【飯田】丸山さんは「明治国家の思想」で、健康な明治ナショナリズムがいかに頹廢していくか、頹廢の象徴が高山樗牛だとする説明をしていますが、一つ注目できるのは、丸山さんは福沢諭吉の影響もあって自由民権運動に対する評価も低いんですね。福沢が自由民権運動は政権のことばかりで人権のことをいわないと批判する点に共感しています。吉野のデモクラシー論については、ロシア革命の影響を受けて新人会が社会主義に行くような風景を子供の頃に見ているわけで、吉野が「大正デモクラシー」論者として出てきた時期を知らないわけです。「大正デモクラシー」を身体で感じることはなく、吉野は過去の人なんですね。藤田さんもそれは同じですね。

【平野】丸山の時代には吉野はすでに過去の人で、資料的にも目にしていないということですね。

【飯田】『吉野作造博士民主主義論集』〔全8巻、新紀元社、1946-47年〕の内容についても、戦後初めて見たくらいじゃないでしょうか。石橋湛山〔1884-1973〕についても同様で、湛山が作った「自由主義」をめぐる座談会の本〔『自由主義とは何か』東洋経済新報社、1936年〕も当時はほとんど読まれていませんし、ましてや「小日本主義」なんてのは同時代で注目していた人はそんなになくて、後から再発見されたものではないでしょうか。あれは明かにイギリスの“Little Englandism”をモデルにしている、その前の徳富蘇峰〔1863-1957〕の「膨張的国民性」論〔1894年〕への転換は、“Greater Britainism”をモデルにするもので、チェンバレンの動きを日本にもって来たものではないでしょうか。戦時下に自由主義としてがんばったというようなカテゴリーにあてはめてみても、結局勝った負けたという議論、いわゆる「気分的自由主義」（『自由主義とは何か』に出てくる語）にしかならないですね。

5 アジア主義、アジア論の課題

【藤村】飯田先生は大正知識人の研究であれだけのものをお書きになったわけですが、彼らのアジア論をお書きになろうと思われたことはないのでしょうか。

【飯田】あの頃、アジア論はまだ全然なかったのです。『近代日本政治思想史』〔橋川文三・松本三之介編、第1巻、有斐閣、1971年〕のなかに植手通有「対外観の転回」という部分があったぐらいで、そのなかにアジアは出てはくるけれども、やっぱり中心ではないのです。もちろん、福沢諭吉の「脱亞論」〔『時事新報』1885年3月〕は、竹内好〔1907-

1977]が『アジア主義』〔現代日本思想大系第9, 筑摩書房, 1963年〕の「解説」で問題提起したことで、問題化します。という程度で、「アジア観」という言葉そのものも登場していなかったというのが実情でした。

【藤村】その後、先生は北東アジア研究の研究者が集った島根県立大学に赴任なさったり、『韓国政治思想史』〔朴忠錫著, 飯田泰三監修, 井上厚史・石田徹訳, 法政大学出版社, 2016年〕で「解題」をお書きになったり、琉球の問題についてもお書きになったりと、大学での職責上の影響もあるかと思いますが、東アジア史との関わりをたくさんおもちになったように思います。博士論文を執筆された頃とは状況が変わって、その後、新たに東アジアについてご考察を深められたのではないかと考えますが、いかがでしょうか。

【飯田】私は博士論文の後に吉野作造をやって、ちょうど松尾尊兌さんが吉野について『中国・朝鮮論』〔平凡社, 1970年〕を編集し、「解説」をお書きになりました。

私の図式にすれば、大正知識人というのは、国家意識を離れて自我と社会の方へ行きます。しかし、それが大正末期から昭和にかけて階級と民族という段階になっていくのです。階級の方はインターナショナルで、とくにアジア主義ということにはならないけれども、他方で民族という方へ向かいます。私が扱った大正初期には、そういう意識はみんなもっていません。ただ、あえていえば、辛亥革命が起こったことで中国に対する認識を深める。その前に日清・日露戦争があって朝鮮を植民地にする、朝鮮を侵略するのとクロスしつつも、辛亥革命を一つの革命として捉えていきます。それは北一輝なんかがそうだけれども、そうした認識が部分的にはあったのです。

ただし、植民地朝鮮を独立させるという方向があるけれども、アジア的なものとして固有の意味を朝鮮独立に見出すというところまでは到達していないですね。北の場合も、結局、辛亥革命に加わってそれで第三革命という段階で深入りしていきます。

民族という言葉のなかのエスニシティというイメージは、たとえば高山樗牛が黄禍論に対抗して、モンゴル種とインド・ヨーロッパ種の戦いだ、そういうことを明治30年代半ばにしています。彼は、日本主義みたいなものに対抗して日蓮〔1222-1282〕へと向かいます。日蓮にすれば、仏教ブッダの真理を体現しているモンゴル軍こそが、立正安国論を立てていた自分〔日蓮〕を無視した鎌倉幕府、当時は北条執権を懲罰した、というようないい方をします。仏教的真理が国家よりも上だという、そういうものが出てきている点が面白いですね。

北も最初の『国体論及び純正社会主義』〔北輝次郎, 自費出版, 1906年〕では、アジア的なもの、東洋的なものということはいってなくて、むしろ、明治維新は維新革命で

あって、フランス革命などと対峙させながら論じています。

しかし、アジア的とか、東アジア的とかいうのと、儒教を中心に考える、仏教を中心に考えるものとは、全く違ってしまうわけです。19世紀になって西欧列強がアジアへ帝国主義的な進出をしてくる。それで「アジア」とか「東洋」とかいい出します。つまり、それに対する被害者の共同性という意味なのですね。

明治の自由民権時代の「民権数え歌」や「よしや武士」などといった民権演歌が印象的です。たとえば、次のような部分があります。「よしやあじやの癖じやと云ど 卑屈さんすなこちの人」。卑屈な奴隷根性だ、というのですね。魯迅〔1881-1936〕が描いたような世界です。福沢なんかも、ヨーロッパに行く時に香港などで見たクーリー〔苦力〕の姿に憤っています。福沢にすれば、中国人、当時の「支那人」がダメなのは、卑屈な精神を植え付けられていて、独立の精神がないからだということです。

福沢の「脱亜論」というのは、いろんな人が論じていますが、次のように理解しています。朝鮮の開化派が独立党で、守旧派が事大党なのです。事大主義は清国に仕えるということです。事大党が政権を握って、独立党の金玉均〔1851-1894〕一派を弾圧します。福沢はそれに対して憤り、朝鮮政府のような「悪い友達」と付きあっていたら、自分もダメになるから悪友は謝絶すべしというわけです。甲申事変〔1884年〕クーデターは李鴻章〔1823-1901〕らが介入してきたことで潰されるのですが、金玉均たちが成功して長続きしていたら福沢はそんなことはいわないわけです。数年前に、月脚達彦さん〔1962-〕の「福沢と朝鮮」〔同『福沢論吉と朝鮮問題——「朝鮮改造論」の展開と蹉跎』東京大学出版会、2014年〕を読んで、読後感みたいなものを書いたことがあります〔飯田「福沢論吉の朝鮮問題への『政治的恋愛』について」『みすず』2015年8月号〕。

慶應義塾出身の竹越三又〔1865-1950〕が「福沢論吉先生の最初にして最後の政治的恋愛が朝鮮だった」といったことがあります。金玉均たちが日本にやってくる。そして兪吉濬〔ユ・ギョルチュン、1856-1914〕などが慶應義塾に18歳ぐらいで留学してきます。それを見ていると自分の若い頃、つまり20年、30年前の日本と同じであるというので、応援しようという気になるのです。

「脱亜論」の「脱亜」という言葉は、実は「脱亜論」の前年に、当時、ロンドンにいた福沢が可愛がっていた弟子の一人の日原昌造〔1853-1904〕が、確か山口の出身で「豊浦生」という名で寄稿してきたもので、1884年11月の『時事新報』に「日本は東洋國たるべからず」というものが掲載されます。当時「興亜会」というのがあって、中村正直〔1832-1891〕も参加したアジアを興そうとする会でした。そこでは、もっぱら日朝中の連携を

考えていて、儒教と漢字を共有しているアジアを興すべしという主張でした。ところが、ご存知の通り、福沢にすれば儒教ってのはダメなのです。福沢が脳溢血で倒れ、回復して、もう一度倒れて亡くなるのですが、死去直前の1900年の大晦日に、新しい世紀を迎えるからというので、慶應の学生がお祭り騒ぎをします。慶應の学生は、福沢先生の「仇」といいまして、夜中に鉄砲で的に向かって撃ちます。その的というのが、一つは儒教の古典の老人の儒者の絵、そして福沢は「女大学」批判をしているので、もう一つは妾を囲っている男の絵だったのです。

さて、豊浦生の日原は「余は興亜会に反して脱亜会の設立を希望するものなり」と論じます。おそらく、福沢は「これは使える」と考えたんじゃないでしょうか。それで半年も経たないうちに「脱亜論」が出るわけです。ただし、その後、福沢は一度も「脱亜」という言葉を用いません。さらにいえば、「脱亜入欧」なんて言葉は福沢は一度も使ったことがないのです。

どこで使われたかということは、丸山先生が調べて学士院で報告しています〔「福沢論吉の『脱亜論』とその周辺」日本学士院論文報告、1990年9月。丸山眞男手帖の会編『丸山眞男話文集』4、みすず書房、2009年、所収〕。それによれば、慶應出身の鈴木券太郎〔1863-1939〕による『山陽新報』の社説「欧化主義を貫かざるべからず」というもので最初に使われています。「脱亜」が「入欧」とセットになるというのは、福沢の用法ではないのです。「脱亜論」は戦前の『福沢全集』〔全5巻、時事新報社、1898年〕にも、大正末年の『福沢全集』〔全10巻、国民図書、1926年〕にも収録されず、『続福沢全集』〔全7巻、岩波書店、1933-34年〕に初めて収められています。しかし、短いうえに戦前は一度もそれに着目しなかったし、引用もされていません。丸山先生によると、戦前・戦後の「脱亜論」のコンテキストにおいて重要な役割を担ったのは竹内好だと指摘します。

丸山先生は「マックス・ヴェーバーの会」〔1992年〕というところに呼ばれて行きます。丸山先生はここで、話し始めると3～4時間喋り続けます。そして後の懇親会の場に行っても、ずっと喋り続けます。ですから、これから引用する肝心のところはテープ切れで終わっているのですが…。ともかくその時の懇親会での丸山さんの話によると、「脱亜論者」福沢というのは「戦後神話です」というのです。「起源は日本浪漫派、保田與重郎〔1910-1981〕とかね。文明開化が今日の諸悪の根源である、その標的に福沢になった。戦後それを継承したのが竹内好、僕の親友なんです。竹内好が福沢の『脱亜』を強調したわけです。それは、影響力がすごいからね。彼は日本浪漫派から出ているわけです。保田と友達〔大阪高校の同級生〕ですから、『近代の超克』もそうでしょ。竹内君が福沢の

『脱亜論』について書いているものは非常に面白いです」といういい方をします〔第78回 マックス・ヴェーバーの会例会にて〕丸山眞男手帖の会編『丸山眞男手帖』第32号、2005年1月、36頁〕。

丸山さんと竹内は吉祥寺の近くだったもんだから、しょっちゅう会ってるんですね。実は、『死霊』〔真善美社、1948年〕を書いた埴谷雄高〔1910-1997〕もそうだし、武田泰淳〔1912-1976〕もその近くに住んでいました。編集者が丸山先生の自宅を訪れて、「次は竹内先生のところに行くんですが」というと、丸山先生は「じゃあ、僕も行く」なんてことがあったらしいです。その「吉祥寺グループ」は、回りもちで夫婦で集まってダンスパーティーなどもやったらしく、その時は埴谷がいちばん颯爽として、武田は楽しい崩れた踊り方をし、竹内は踊ろうとしなかった、と丸山さんはいっていました。

丸山さんは『日本政治思想史研究』〔東京大学出版会、1952年〕の「あとがき」のなかで、戦前の発表論文を自己批判しました。停滞した中国と近代化していった日本との対比が、近代的思惟の成熟ということを課題にしてきたといいながら、しかし、それは中国革命と出会うことによって認識を改めたという。要するに、ある意味では中国が先に行ったということです。実は近代を超えるんじゃなくて、未経験のまま社会主義の方へ行っちゃったわけですが。丸山さんは、竹内との接触でそういうことを痛感するに至ったということを書いています。丸山さんは、一度も竹内を批判的に書いたことはないです。先に出てきた『脱亜論』について、丸山・竹内の両者の直系である橋川文三さんも『順逆の思想——脱亜論以後』〔勁草書房、1973年〕で書いていますが、これはまさに竹内の影響なわけですね。

明治時代でいうと、たぶん「東洋」という言葉でやっぱり重要だと思うのは、中江兆民です。1881年に『東洋自由新聞』を出します。兆民は明らかに東洋にも「自由」の伝統があると論じています。たとえば、『一年有半』〔博文館、1901年〕では、孟子はすでに民権を唱えていると論じています。上海に東亜同文書院の源のような「東洋学館」を作ろうとして、一緒にやろうとしていたのは、福井の民権家で、これが「東洋豪傑君」のモデルの一人といわれている杉田定一〔1851-1929〕〔号鶉山、じゅんざん 雑賀博愛編『杉田鶉山翁』鶉山会、1928年〕です。その彼と一緒にやろうとするが、挫折するのです。兆民にとって、東洋は蔑視の対象では全くないのです。『三酔人経綸問答』〔集成社、1887年〕での「洋学紳士君」と「東洋豪傑君」、それをアウフヘーベンする「南海先生」という構図では、「東洋」とは一方向的なマイナスイメージじゃないですよ。西洋と東洋とで共通しているものがあるんだというイメージです。同じものが流れているというか、違いをあまり

強調しません。兆民にとっての漢学とは、儒教だけではないのです。禅の『臨濟録』なんかの引用もありますし、老荘の荘子がとくに好きで、という具合に普遍的なものがあるという感覚が強いです。『常山紀談』〔湯浅常山, 1771年, 1708-1781〕を仏訳してみようとしたり、ルソーの『社会契約論』を『民約論』として漢訳〔『民約訳解』仏学塾出版局, 1882年〕したりという風な感覚が兆民にはあります。

そうはいっても、アジア主義という言葉で括れそうなものはなかなかありません。大アジア主義とか、なになにアジア主義とか、大きな本が出版されます。そういうものを比較研究する意味はありますが、結局、戦前のそれは全て「大東亜共栄圏」につながってしまうわけです。「東アジア共同体」なんてことを、今頃また中国がいい出しているようですが、それはまさに1930年代末に近衛文麿〔1891-1945〕のブレイン集団「昭和研究会」が打ち出した「東亜協同体論」(三木清〔1897-1945〕・蠟山政道・尾崎秀実〔1901-1944〕などの)から一歩も出ないもので、あれは中国が盟主になる「大東亜共栄圏」ということにしかならないのではないのでしょうか。「アジア」という意識は、どういうなかから出てきたのかって言うと、日本が帝国主義的支配に加担していくなかで、抵抗のなかから出てきたわけです。吉野でも、朝鮮の三・一独立運動や中国の五・四運動で動いている若者たちを助けなきゃという気持ちがあったにしても、じゃあ吉野が「アジア」に独自のものを考えていたのかというと、それまた難しいですね。おそらく、大正知識人のアジア観になにか固有の特徴があったかという風にまとめることはできないだろうと思います。〔以上〕

〔付記〕 インタビュー日：2018年9月9日, 12月1日

場所：飯田泰三氏宅

本文作成にあたり科学研究費（「大正デモクラシー」の総合的研究, 基盤研究C, 平成29～平成32年度）の助成を受けた。

